

「韓熙載夜宴図」に描かれた時代と文化生活

自発展開型

経済学部 4年 福田晃大

指導教員：村越貴代美

宴会の場面を描いた中国の絵画の1つに、五代十国の南唐時代の宮廷画家・顧闳中が皇帝・李煜の命令を受けて描いたとされる「韓熙載夜宴図」があり、当時の貴族生活を描いた貴重な画像資料として利用されている。しかし現在伝わっているのは後世の模本で、模写した画家やその時代の新しいイメージや風物が加えられた可能性がある。本稿では、模本の中でもっとも完備している北京故宫博物院所蔵の「韓熙載夜宴図」（以下、北京故宫本）について、収蔵過程や画の構成を考察し、宴飲場面を描いた他の画との比較や関連する文献の検討を通して、北京故宫本が制作された時代を確定し、この画に描かれている文化生活がどの時代の風物を反映しているかを論じた。

第1章では、北京故宫本に残されている印記や題跋によって、その制作年代を論じた。最も古い印記が南宋で活躍した史弥遠の「紹勳」印であることから、13世紀初までに成立していたことを確認した。

第2章では、「韓熙載夜宴図」の場面や登場人物について述べた。画は5つの場面で構成され、主人公の韓熙載が全場面に登場するほか、状元郎粲や教坊副使李嘉明とその妹で琵琶を弾く女性、舞女の王屋山、韓熙載と親交のあった和尚の徳明らが登場することを確認した。

第3章では、画中の男性の服飾について論じた。服の色は北宋初期の制度を反映している。頭にかぶっている「幘頭」は、当時の典型的な形状のものを客たちは着用していて、後ろについている2本の「脚」が丸く細長い点は唐代風である。韓熙載の「幘頭」は特殊な高級なもので、時代は確定できない。総合的に考えて、男性の服装、とくに客たちの服装は南唐から北宋初期の風俗を反映しており、韓熙載の服装だけが若干時代が下ると思われる。

第4章では、女性の体形と服飾について論じた。体形は五代以降に好まれたほっそりした姿で、服飾は9世紀以降に流行した唐代のファッションに似ている。全体としては、唐風をまねたとされる南唐の

女性の姿が描かれていると結論づけた。

第5章では、食卓と食器について論じた。画中に描かれている足の長いテーブルや背もたれのある椅子は、唐代以前の絵画には見当たらず、宋代の「宋太祖坐像」で見ることができる。テーブルの上に並んでいる食器は、南唐の陵墓から出土した白磁と同じようなシンプルな白磁である。白磁は唐代では華北中心に生産されていたが、五代や北宋になって中国全土に生産が広がった。また第1場面で描かれているものと酷似した北宋の酒器が出土しており、「影青」と呼ばれる独特な磁器である。これが生産されるようになったのが11世紀であることから、「韓熙載夜宴図」中のテーブルや食器、宴席の様子は北宋の風物を反映していると結論づけた。

第6章では、画中に描かれている屏風と、その屏風に描かれている山水画について論じた。屏風に描かれた山水画は、山の形状が五代から北宋の時代に主に華北地域で描かれた山水画に似ている。また、2本の大きな松とその姿、筆使いは1072年に郭熙が描いた「早春図」に酷似している。このことから、「韓熙載夜宴図」中の屏風に描かれている山水画には北宋の画風が現れていると考えた。

全体を通してみると、男性の幘頭や女性のファッションは五代の様相を表しているのに対して、テーブルや椅子、磁器、屏風中の山水画などは北宋の様相を表していることが分かった。画に残されている印記から、北京故宮本の成立の下限を13世紀初としたが、上限はいつごろまで遡れるかと言えば、一部には南唐時代の風俗が残されていると思われるものの、一部には北宋時代の文物も反映されていたことから、北宋後期に制作されたものと考えられる。

北京故宮本「韓熙載夜宴図」は、構図も色彩も美しく、夜宴のたけなわの場面から途中の休憩や最後の見送りのシーンまで、その一部始終を物語るようなストーリー性の豊かな作品である。ただし、後世の模本（11世紀から13世紀初制作）であり、一部に模写された北宋当時の文物が反映されていることをしっかりと見極め、画像資料としての価値と限界を知りつつ、「韓熙載夜宴図」について今後は利用していくべきであると結論づけた。